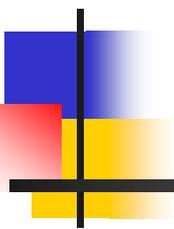


ドキュメント作成 (論文・レポートを書くこと) の重要性



「書きとどめよ！

議論したことは風の中に吹き飛ばしてはならない。」
(ガリレオ・ガリレイ)

群馬大学大学院 工学研究科電気電子工学専攻
小林春夫



仕事ができる人、組織

ドキュメントがしっかりしている。

書類、技術レポート、設計資料 等。

大学の研究室なら、
卒業論文、修士論文、学会・研究会原稿、
発表スライド、論文、特許 等を
しっかり作成する必要がある。



人間は忘却する

何日かすると 細かいことは忘れてしまう。
書きとめておけば 忘れてもよい。
必要なら書いたものを見返す。
現在の仕事にのみ集中できる。

今の時代であるので
ワード, Latex, ppt の電子ファイルに書く。



自分のために 論文・レポートを書く

論文を書き、発表スライドを作成することで

➡ 考えが整理される

成果、課題、問題点が明らかになる。

論文、特許、学会発表、著書等の

「書いたもの」は、10年、20年後にも

自分にとって残っているものになる。



チームで仕事をするとき

口頭ではなく、
書いたもの(文章、図等)をもとにして
議論する。

口頭では誤解が生じる。
誤りをチェックできない。



他の研究者に成果を伝える

「ほかの者が彼の貢献を利用してくれる
ときのみ、成果を上げることができる」
(貢献のリレー、Peter F. Drucker)

「情報発信」



英語か日本語か

英語の論文

世界中の人が読んでくれる。

日本語の論文

「オレの論文を読みたければ、
諸外国の人たちは日本語を勉強しろ」
くらいの気概が必要か(?)。



書きとどめることが重要

著名な学会誌・国際学会

➡ 多くの人たちの目に留まりやすい。
が、「snobbish（貴族主義、権威主義的）である。
内容が良ければどこでもよい。」
という考え方もあり(?)

いずれにせよ、「書きとどめる」ということが重要。



後世に成果を伝える

ガリレオ・ガリレイ

 命懸けで人生を賭けて著書を記す

「天文対話」 地動説者と天動説者との対話

「新科学対話」 晩年、失明して代筆にて記す

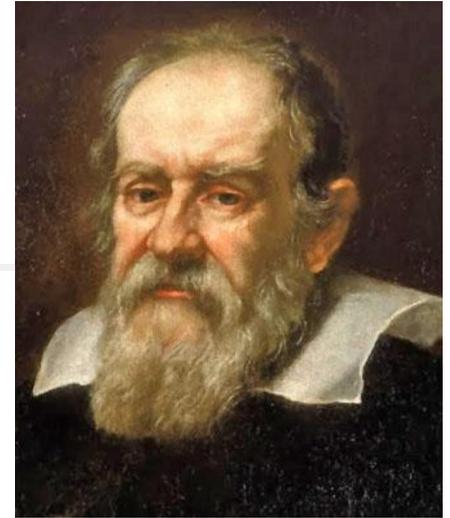
死後、高く評価される。



現在にもその著作が伝わる(日本語訳もあり)

ガリレオ・ガリレイ

(Galileo Galilei, 1564-1642)



イタリアの物理学者、天文学者、哲学者。
パドヴァ大学教授。

望遠鏡による天体の観測 → 地動説

「それでも地球は動いている」

振り子の等時性。

自由落下の時間は物体の質量の依らない(ピサの斜塔)

実験による検証と、その数学による解析。

その業績から天文学の父と称され、フランシス・ベーコンとともに科学的手法の開拓者として知られる。



大学での教員評価

研究論文業績中心

→ (問題もあるが ある程度)正しい

ガリレオは命懸けで著書を記す



現在もその知の財産が直接継承できる。



研究者間の直接の対話も重要

研究者同士の face-to-face の議論も重要。
論文では「綺麗なこと」しか書かないこともある。
直接会って本音で議論する。

The most important thing in communication
is hearing what isn't **said**. (P. F. Drucker)

上記で **said** を **written** と置き換える。